

東アジア的な視角から資料を読む ——日本語訳『新羅殊異伝』について——

崔 在佑

1.

外国に住むと母国についてのすべてが関心事となる。‘外国に住むと愛国者になる’という言葉がただできたのではないだろう。しかし、最近韓流ブームが随分収まるにつれ、個人的には韓国関連出版物についての関心がそれほど湧いてこないようになったのも事実である。そんな中、この間出版された日本語訳『新羅殊異伝』（小峯和明・増尾伸一郎 編訳、東洋文庫 809、平凡社、2011）は個人的な関心分野と重なることもあり、久しぶりに本を読む楽しさを味わわせてくれた。

この本は日本で古典文学を研究している研究者達が共同で行ってきた講読の結実である。専攻は違うが、韓国文化に興味を持つ日本の研究者四人と主に説話文学に関心のある韓国の若い研究者四人、合わせて八人が成し遂げたものである。あとがきによると、翻訳者たちが初めに‘殊異伝’についての情報に接した2000年秋から10年余りの長い時間をかけて出したものらしい。当然ながら、その内容は決して軽くない。

本を読んでいるうち、まず日本の研究者たちの考証学的な力量に感銘を受けた。それと同時に、最近日本の韓国学研究者に流行っている東アジア圏域を合わせようとする視角が印象深かった。もう少し具体的なところを上げて話してみる。訳者たちにとって、‘殊異伝’は韓国の歴史的資料でありつつ中国と日本を共に念頭に置いて読むべきものでもある。つまり訳者達の表現を借りると、1. 歴史故事の説話集で、2. 古代文化の趣として、3. 東アジア文学共有圏として意義を持つ資料と、認識する必要がある。そのような意図が注釈と解説を通して明確に現れている。その中で三つ目の意義については、韓国の学界が強くアピールできなかった部分でもあり鮮明に記憶に残った。

そして、翻訳についての悩みも構成を通じて垣間見ることができた。外国で生活する研究者であれば誰も一度は翻訳について悩むことがあると思う。付言することもなく、翻訳をすることはそれほど簡単な作業ではない。読者は誰にするのがいいのか、どんな形式をとるべきか、どれくらいのレベルの言語を使うのが良いのか等々顧慮しなければならない要素が沢山あるからである。特に、一般人には見慣れないかつ難しい資料を平凡な自国の言語に移そうとするときは、その悩みの程度がさらに深まる。この席を借りて訳者達のような悩みの片鱗も一緒に表すことができることも期待する。

2.

‘殊異伝’は本の実物が存在しないにもかかわらず、その文学史的な価値により初期段階から学界の注目を浴びてきた。逸文の個別作品を分析した論文や『殊異傳』の全体的な形を把握するための論文も多数発表されたうえ‘殊異伝逸文’を全体的に集めた単行本もす

に何回か出版されている。20世紀前半に今西龍や崔南善により‘殊異伝逸文’についての紹介や解題が発表されて以来、関心が途絶えたことはない。90年代に入ると、以前の成果をまとめつつ‘殊異伝逸文’全貌を紹介する本が出版されることとなったが、博而精出版社からの『訳注殊異傳逸文』(1996)と嶺南大学出版部からの『新羅殊異傳輯校と訳注』(1998)がそれである。

崔南善が逸文を集めて資料としての注目度を高めその後の研究に弾みをつけたとしたら、90年代の成果は本格的に‘殊異伝’逸文についての理解の道を開いてくれた。『譯註殊異傳逸文』は殊異伝逸文と共に原資料との関連性が深い資料を一緒に集め、現代語訳と注釈をつけた上で以前の研究成果を整理したことで‘殊異伝’についての理解と研究の土台を作ってくれた。そして、続いて出版された『新羅殊異傳輯校と譯註』は逸文関連資料と参考資料をさらに積極的に探して提示し逸文についての視野を広めた。この二つの成果により‘殊異伝’についての接近と理解が一層容易になったと言えよう。

日本訳『新羅殊異伝』が以前の成果を土台にしているのは間違いない。それにもかかわらず、この本の持つ意義が以前の解説本と異なる点が何か所ある。何より‘殊異伝’を単純に韓国の資料のみで理解しようとしていない部分が目立つ。つまり、訳者達は『新羅殊異伝』を通じて東アジアの比較説話への窓を開けようと考えている。まず、従来の日本の比較文学研究では、‘日本と中国・朝鮮などを一対一に対応して比較し、そうしながら日本が外国のものをどのように受け入れたかに取りまとめられる一方通行の受容論で終始する傾向があった’と指摘する。そして、訳者達はこのような一方的な視角から脱皮し、‘殊異伝’を東アジアに共有される文学として双方向からお互いに読んで理解することができる価値を模索しようとする。究極的には、この本を通じて韓国や中国の研究状況を基盤にしながらも、‘日本側からどこまで読み取れるか、一度は試してみる必要がある’ので、単純に外国文学だと外部に対象化することではなく、東アジア文学としてお互いに共有しながら説話世界の解明を求めることができることを期待’する。

それぞれ専攻が異なる研究者が集まって長い間講読を続けられた理由は、より広い視角で資料を扱ってみようとする問題意識が共有できたからであろう。さらに、このような問題意識や努力が本の形で出版される段階にまで進んだのも、‘殊異伝’を単純に古代朝鮮の古典として韓国文学の中に閉じ込めず、どうすれば日本をはじめとした東アジアと幅広く共有することができるかという一念にあったと考えてよいだろう。つまり、講読の成果をまとめて公開的に表すことで‘殊異伝’の存在を知らせたいという訳者達の真心がこの本の出版の趣旨に隠れていると言えよう。

この本は、‘殊異伝逸文’を紹介する‘本文’と読者に‘殊異伝’を理解させるために追加した全体的な‘解説’、このように大きく二つの部分で構成されている。本文の部分は一番前に現代語訳を置き本文と訓読、そして個別作品の解説順で続く。現代語訳を先に見せていることと訓読を付け加えている点が以前の成果とは差別される場所である。現代語訳を前の部分に置いたのは、何より‘殊異伝’を容易くかつより多くの読者に接できる機会を与えるための考慮の一環であろう。翻訳を直訳より意識を中心とすることで文章を理解しや

すくしていることはそんな推測を裏付けてくれる。本文に続く訓読は少し見慣れない表現ではあるが、ここに注釈をつけていることを考えると、研究者に原資料の意味をより理解させるための悩みではなかったかと思う。解説は‘殊異伝’の背景を理解させるための部分である。1節の総説では、訳者達の‘東アジア的な視角’をもととし全体的な意義を中心に‘殊異伝’の価値を積極的に改進している。2節と3節は‘殊異伝’が胚胎された歴史的な背景に触れる。続いて、4節と5節は引用の出典と関連資料を提示しつつ‘殊異伝’の逸文が載せられている文献について簡潔に紹介し、さらに‘殊異伝’の著者として追論されている‘崔致遠’と彼の著作についての情報を提供している。そして、6節と7節では研究者のために研究史と参考文献を整理して提示している。

3.

上でこの本の構成の特徴について少しふれたが、それ以外にも特長として大きく二つが挙げられる。注釈の丁寧さと東アジア的な視角に基づいて積極的に施されている解説の内容がそれである。まず、注釈の丁寧さから言及してみよう。注釈をつけるときに単語の意味のみならずその根拠となる資料まで細かく提示することで、以前の作業では少し足りなかった部分を補っている。精密な注釈は日本の考証学的な研究の雰囲気が土台となったと言えるだろう。このような丁寧さは、一般読者が内容を理解するのを助けるうえ研究者にとっては親切な研究の指南となる。又、東アジア的な視角が印象深い。東アジア的視角とは、言葉通りに資料を読む視角を一国に制限せず、より幅広く広めて東アジア圏域から見通そうとする概念として理解できる。さらに訳者達はこの本の原資料である‘殊異伝’のような漢文文学、つまり韓国・日本・中国・ベトナムなどが含まれる漢字文化圏の資料が‘東アジア文学’として定立されることを願う。このような意図が解説を通してありありと表れている。

注釈は基本的に高麗時代に書かれた三国時代の歴史本である『三国史記』や『三国遺事』の内容を中心とした関連記録をできるだけ詳しく見せる。それは読者が作品の内容をより精密に理解することができる根拠としての効果を発揮する。さらに、作品と関わりのある中国と日本の関連記録を同時に紹介することで、読者に資料についての情報をより広めてくれる。例えば、〈脱解〉に見える龍城国の王妃の出身についての注釈がいい例と言えよう。先ず『三国史記』と『三国遺事』に載せられている女人の国についての内容を紹介したあと、中国の『後漢書』に見える女国の話と日本の『お伽草子』の〈御曹子島渡〉の中にある女たちだけが住んでいる‘女護の島’の様子と一緒に並べてくれる。このように韓国の資料を紹介してから中国と日本の関連資料を共に提示してくれるのは、注釈をつけるこの本の基本方式である。単語や文脈の意味を説明することだけでなく中国や日本の資料も共に提供することは、当時の東アジアの有様にまで視野が広められる意味もあり、その意義が少なくないと思う。

解説を施しながら‘殊異伝逸文’各作品の持つ意義をより積極的に与えようとするところもまた、この本の大きな特徴である。積極的な意味付与が東アジア的な視角をもとに成し遂

げられているところが実に興味深い。〈迎鳥・細鳥〉については太陽神との連携を想定しながら、太陽神が船に乗って海を渡る‘太陽船’と結び付ける。所謂、太陽信仰との関連性である。この作品を太陽信仰と連携して解釈すること自体は新しい試みではない。しかし、『日本書紀』と『古事記』に載せられている新羅の王子の‘アメノヒボコ’の内容をあげつつ関連をあらわにしている点、さらに神話的な観点に傾いていた従来の研究視角に歴史・社会的な観点を加えて作品の意義を多角化しようとする努力は認めるべきところである。

〈迎鳥・細鳥〉を解釈するときも歴史・社会的な観点からの接近が有効になっている。この話の背景として、当時の新羅が百済との戦争で社会の雰囲気混乱していたことに加え日食についての記録が何回も残されていることが解釈の根拠として提示される。つまり、繰り返される戦争や異常現象により拡大されていく社会不安を解消し王権を強化するためにこの話が語られた可能性を想定する。〈阿道〉の意義を述べる部分では仏教と新羅の金氏王朝との関係が注目される。まずは、仏教と新羅の金氏王朝との連携を強調するために金氏として初めて王位に就いた味鄒王時代に仏教が伝わってきたという神話が必要ではなかったらどうかと推測する。続いて、僧侶阿道の話が歴史的な事実とは離れて新羅金氏王朝の始祖と連結する神話的な僧伝につながり、人口に膾炙するようになることについて言及する。そして、結局は阿道の話が朴寅亮の『新羅殊異傳』に採録され、その後『海東高僧傳』の著者がその内容を引用したのではないかと解釈する。作品の意味をこのように与える方式は他の作品でも一貫して行われている。まだ根拠が足りないところがないとは言いがたいが、推測が強い意味付与だと軽く扱うよりは、事実の可否は別途考証すべき課題として認識しつつ、積極的に意味を探る方向も真摯に受け入れてもいい考え方はなからうか。

前で少し触れたが、一般読者のために工夫した構成もまた、訳者達の悩んだ結果の成果として讃えることができそうだ。‘殊異伝逸文’の資料としての性格を考えると、直訳を中心に翻訳した場合は注釈がついていても一般読者が簡単に理解するのは難しい。しかし、現代語訳を一番前に置くと外国の昔話をより気軽に読んでいる気分になる。さらに、現代語訳をする時にも意識に力を注いで内容をより伝えやすくしようとしている。例えば、原資料では代名詞が使われ少し理解しにくくなっている部分には代名詞の代わりに人物の本来の名前を付け、読者がその部分の人物を明確に認識できるようにしてくれる。これもまた工夫の別の実例となる。例えば、〈阿道〉の原資料では主人公の名前よりも‘師’という普通名詞が使われている。‘法師’や‘お寺様’程度の意味であるが、この本ではずっと‘阿道’という名前で翻訳する。このような翻訳の方式は、行動の主体が明確になるため、読者が話の流れをより理解しやすくなる効果を持つ。それ故、難しい資料を一般読者に紹介する本の遣り方としてはとてもメリットがあると思われる。

この本の優れたところを讃える席でもう一つ考えるべきことがある。それは意味が曖昧なところにも積極的に意味を探ろうとする試みである。これからの‘殊異伝’の注釈作業に良い刺激を与えるに違いない。例えば、〈首挿石柁〉の前の部分の内容である‘數月仇暴死。經八日’の‘八日’に注釈をつけるときに‘七日を単位にする場合が多く、初七日を過ぎた意があるか’と句節が持つ普段の意味を超えて総合的な観点から意味を探り出そうとして

いる。推測ではあるが、歴史・社会的な情報をもとに積極的に意味を与えようとする様子が新鮮である。

以上で言及した特徴は、以前の注釈の成果から受けた影響が少なくないとしても、この本が成し遂げた大切な長所であることは言うまでもない。ところが、数多い長所の中で物足りない部分があるのも事実である。これから行われる注釈作業に少しでも役に立てればという気持ちで、目につくところを何か所か指摘してみる。

まず、言及したいことは原文を入力する方式の問題である。原文が日本の漢字で入力されているのは、日本の学界の雰囲気を考えると理解できなくもないが、写真などの形で原資料が紹介されていない側面から見ると、研究者にとっては相当心残りとなっているところである。一般読者にはあまり意味がない上実質的にも意味上の差がないとしてもその心残りは解消されない。

漢文の原文を入力する作業ではいつも起こりうる問題ではあるが入力ミスも見つかる。入力の際に原文が抜け落ちるか余計な字が挿入される場合がそれである。一つの文字が抜け落ちている部分はあちこちに見えるが、〈迎烏・細烏〉の‘日者奏曰，迎烏細烏，日月之精。今去日本，故有斯怪。’が‘日者奏云，日月之精。今去日本，故有斯怪。’と入力され、‘日者奏曰’は‘日者奏云’に、そして‘迎烏細烏，日月之精’は‘迎烏細烏’が抜け落ちてしまい‘日月之精’のみになっている。訳者達が原資料として『筆苑雜記』を直接明かしているのに、明らかに入力ミスであろう。原資料にはない文字を意図的に挿入した部分も、原文を紹介する意味も一緒に持つ本としての意義を考えると惜しいところである。例えば、〈迎烏・細烏〉の最後の部分である‘是新羅阿達王四年也’は‘是新羅阿達羅王四年也’とされている。‘阿達王’の名前を正式名称である‘阿達羅王’と補充して翻訳しているのである。翻訳文に注釈をつけて示せばいいと思われるところであるが、あえて原資料の内容を毀損する必要があったのか疑問が残る。

原資料の内容を毀損しているという意味では、構成の一貫性についてももう少し論議した方が良かったのではないかと思う。作品（訳者）により原注をありのまま生かしている作品（例えば〈阿道〉）もあれば、つけてない作品（例えば〈圓光〉の‘眞平王二十二年，庚申【三國史云明年辛酉來】’の原注部分が脱落している）もある。資料的な価値を考えると、一貫して原注をありのまま入力した方がもっと良かったのではないだろうか。原注を本文と間違って入力した部分も原文の一部を脱落させた点と同じく残念である。

訳者達が関連資料を選んだ明確な基準を知らないため、是非が言える立場ではない気もするが、資料を選ぶ基準についてももう少し考えるべきところはあったのではないかと思う。素材が似ていることや重要人物と関わりのある内容が入っている資料なら全て関連資料として扱っても良いのだろうか。関連資料の選別にはより慎重を期する必要がある。‘殊異伝逸文についての注釈’という前提の下での作業であれば、単なる素材の類似を超えて作品の内容との関わりをより精密に選別する必要があると思う。

翻訳上の問題は、漢文の特性もあり正確に指摘しながら言うことは難しいところがある。

しかし、原資料の内容を歪曲するようであれば困る。〈迎烏・細烏〉の内容である‘又漂至其國立爲妃’は‘また漂流してその国に至ったが、立てて王妃にした’くらいに翻訳できるが、‘潮に流されて、同じ国についた。そして、その国の妃になった’と翻訳している。意味上ではそれほど大きな差はない。そうではあるが、主体と客体を変えることで発生しうるイメージの変化を考えると、翻訳するときにもう少し顧慮すべきである。作品の内容を歪めるまでには至らなかったものの、結果的に作品が持っているイメージの豊かさを減らしてしまった気がする漢詩の解釈部分も一度検討する必要があるようだ。文学作品、特に伝奇作品に含まれている漢詩の役割は意味を伝達するのみの役割を担う工夫ではない。セリフやイメージの側面で様々な役割をする漢詩を平凡な平叙文に解釈したことで、漢詩の機能が制限されてしまったのも残念な気がする。

4.

訳者達にとって‘殊異伝’は単なる化石のような存在ではない。後世に化石のように残っている逸文を読むだけでも、当時の多彩な風景が味わえるし朝鮮半島の古代文化の趣が垣間見える資料である。又、個人の趣味のレベルで奇談を集めたものではなく国家的且つ仏教的な観点から‘怪異’や‘靈異’を把握しようと公的に刊行された本として認識されている。ひいては、三国時代の資料としては最も大切にされてきた『三國史記』や『三國遺事』をもあくまで高麗時代に編纂された史書であるので当代のイデオロギーや価値観から自由がきかないものであるとまで言う。まさに、彼らにとって‘殊異伝’は新羅の文化を対象化した世界が広がる最も資料の価値が高いテキストである。韓国の資料が外国に拠点を置いている研究者達にこれまで認められている事実に感謝すべき気持ちでいっぱいになる。

書評を書く席であえて物足りない所を指摘したことはこの本の成し遂げている長所を決して弱化させないと思う。このような良い結実を通じて‘殊異伝’の資料的な価値を日本に知らせることができて本当に幸いである。東アジアを貫通している漢字文化圏の特性上、漢文資料についての翻訳作業は韓国のみならず日本や中国でもほかの資料よりは積極的に扱うことができる。この本をきっかけに『三國遺事』や〈春香伝〉をはじめ特定資料に集中されている韓国の古典文学についての関心がより幅広く広がることを望み、さらにそのような関心が結実として出版されることを待ち望む。